

No. 68

2018.4

世田谷文学館 ニュース

SETAGAYA LITERARY MUSEUM

館長の作家対談
馬場あき子（歌人）



林芙美子《自画像》1932-33年頃 油彩 新宿歴史博物館蔵
（「林芙美子 貧乏コンチクショウ」展出品）

収蔵品のご紹介 《齋藤茂吉旧蔵 諸家短冊帖》より平福百穂短冊

館長の作家対談

ゲスト
馬場あき子
(歌人、文芸評論家)

聞き手
菅野昭正
(世田谷文学館館長)

現代歌壇を代表する歌人の馬場あき子さんをお迎えし、当館館長がお話を伺いました。

表現と社会性

馬場▼今日は私からインタビューしてみようかしら。フランス文学の研究者で、詩や小説の翻訳を通じて作者の魂や、精神や、思想や、さまざまなものを吸収された目で、日本の文学や詩を見るとどうでしょうか。

菅野▼フランス文学に関心を持ち始めた若い頃、日本の小説の世界がどうも狭いとか、社会的な視野が拓けていないなどと生意気に考えたのではないかと思います。例えばゾラの小説は、文章そのものは荒っぽくて好みではないのだけれど、ただ、社会を見る目というか、歴史を見る目というか、そういうものは日本の近代作家とは質的にかなり違うなという感じはありましたね。

馬場▼日本の文学はどう思われますか。

菅野▼近代文学でいうと漱石、鵲外、荷風、芥川といった作家たちはそれなりに悪戦苦闘して日本に近代小説的なものをつくり出したと思います。ただ、現状はどうだろうと首を傾げたくなるとこ

ろもあります。文章はしっかりしていて達者だと思う作家も少なくありませんが、書かれている内容が狭いと感ずることがあります。あるひとつの限られた世界だけを書いても、その世界を象徴的に、寓意的にもつと広げて社会性を持たせることは可能だと思うのですが。

馬場▼それはわかります。文章がうまいというのはやはり、短歌の伝統があるからかもしれないですね。俳句とか、短歌とか、物語の伝統があるので、細かいところはとても細かに書くことによつて、もう少し大きなものにつながろうとするというか、小のところに大きいものが宿ると思つているのでしょね。短歌や俳句にも似たものがあるのではないかと思います。ところがヨーロッパの人は違う。昭和30年代、前衛短歌と呼ばれたものが非常に隆盛を極めたときに、歌人たちは伝統的な表現を突き破ろうとしましたが、結局、旗手である塚本邦雄が亡き後は揺り戻しというか、元へ戻するというか。現在、歌の世界には、言葉に広い世界性や思想性を宿すというよりも、現実のなかの人間の芯みtainいものをあぶり出していきたいという方向がある。他方で若い人は、全然違う言葉と言葉を突き合わせながらももうひとつ別の表現を求めるのだけれども、そこにまた人



馬場あき子(ばば・あきこ)

歌人・文芸評論家。1928年東京生まれ。昭和女子大学卒業。47年在学中、創刊間もない窪田空穂主宰の歌誌「まひる野」に入会し窪田章一郎に師事。同時期に能楽喜多流宗家入門、喜多実に師事し本格的な能の世界にはいる。77年に29年間勤めた教職を離れ作歌に専心。翌年第5歌集『桜花伝承』で現代短歌女流賞を受賞、歌誌「かりん」を主宰創刊した。古典・能・民俗学に造詣が深く、著書に『式子内親王』『鬼の研究』『歌説話の世界』『馬場あき子の「百人一首」』など多数。歌集は第26歌集『渾沌の鬱』(2016年)を最新作として、『葡萄唐草』(85年)で逖空賞、『阿古父』(93年)で読売文学賞、『鶴かへらず』(2011年)で前川佐美雄賞を受賞。94年、紫綬褒章受章。日本藝術院会員。朝日新聞歌壇選者。現在、歌誌「短歌」にてエッセイ「戦争と少女」を連載中。

間味が不足してしまう。そんな堂々巡りをしていくところがあります。

菅野▼それからまた、短歌の場合は文語と口語の問題がありますね。ひとくちに口語といいますが、書き言葉の口語と話し言葉の口語とは同じではないですね。

馬場▼違います。どちらも混せて使いますが、口語を使うと歌に現実感や活力が出るので実に楽な面があります。しかし口語だけでも難しいから、結句は文語がいいとか。今は口語と文語については大きな問題になつていて、私たちもうまくできない。自分としては、言葉というのはマーケティングと同じで、カゴに何を入れてもいいよという気持ちもあります。

菅野▼歌のリズムや調べはいかがでしょうか。

馬場▼口語でも五・七・五の型になりますし、石川啄木も口語で詠つているものがありますし、現代では俵万智や穂村弘などそれぞれの口語表現もあります。寺山修司は文語ですが、寺山は文語で詠つても現在感というか、「今」があつたんですよね。だから口語で歌を詠まないで現在感が出せないというのは、その文語作者に文芸精神の点でどこか欠落している部分があるのかもしれないけれどね。

菅野▼現代の歌人は、文語だと現代的な風景や感受性などをうまく表現できないと感じているのでしょうか。

馬場▼そこはそうでもないと思います。しかし文語というのは、日本の風景を全て文語で詠うとどこかつまらなくなつてしまいます。例えば水原紫苑という現代の歌人は文語作者ですが、彼女は仏文科出身でフランスの景物や、詩人の名前などを日常感覚として持ちこんでくる。そうすると文語でも引き立つんです。口語作者が気楽に口語で詠うと現在感はあるのだけれど、やはり社会性や世界のなかの自分の存在などはなかなか出せませんね。私は現代の口語はもつと磨かなければいけないと思います。口語で短歌をつくるのが、型というもののなかで、今の言葉を磨いていくことになるならば、それもまた素晴らしいと思います。

窪田空穂と古典

菅野▼こちらからのお尋ねですが、馬場さんが歌を志されたのはいつ頃からでしょうか。

馬場▼戦後ですね。戦争中は本やノートのような紙がほとんどなくて、何か書くこうと思つても日記も書けない。それで私は動員された工場で短歌をつくりました。自分のいる「今」を言葉で残しておきたいと思つて、哨戒機が飛んで来るとか、工員が徴兵されていくとか、そういう歌を沢山詠みました。戦後になつて何をしようと考えたときに、やはり短歌しか自分の表現法がなかったという簡単なことです。

菅野▼ご自身で短歌を詠むきっかけは、例えば学校の教科書などでしたか。

馬場▼百人一首と教科書です。子供のころは百人一首全盛期で、親戚などがお正月に集まると百人一首をしました。

菅野▼僕もお正月になるとそうでした。「今ひとたびの」は2つあるけれど、上の句をどう読んだらこつちの札をとるか。

馬場▼「あ」から始まるのが16首あるとかね(笑)。



菅野▼小学生のときに百人一首を全部暗記して今でもほとんど覚えていますが、小学生のときは意味はよくわかりませんでした。旧制中学に入つてから文法など勉強して少しは理解が進みましたが、けれども、ただ、ああいうものを訳もわからず覚えておくというのは……。

馬場▼大切だと思います。

菅野▼のちに役に立つことがありますね。創作の話に戻ると、最初歌を詠まれたときは、一人で孤独につくつておられた。

馬場▼そうです。戦後、自分の歌を活字にしたいと思つたときに、書店に「アララギ」と「まひる野」の歌誌が置いてありました。どちらも仙花紙というザラ紙よりも質の悪い紙で30ページほどの厚みでしようか。歴史ある「アララギ」の表紙は題字が右から書いてありますから、普通に読むと「ギララア」。戦後最も早く創刊された「まひる野」は窪田空穂系の歌誌です。ギララアは嫌だから「まひる野」に入ることにして、それこそ渋谷の書店での偶然の出会いでした。自分の歌を毎月出してみると、掲載が少ないときと、多いときがあるので、多いときの歌がいいのだと思つて、そういう風体(ふうてい)風、歌の姿の表現になつていくわけですね。

菅野▼大岡信さんのお父上は窪田空穂と関係があつたそうですね。

間味が不足してしまう。そんな堂々巡りをしていくところがあります。

菅野▼それからまた、短歌の場合は文語と口語の問題がありますね。ひとくちに口語といいますが、書き言葉の口語と話し言葉の口語とは同じではないですね。

馬場▼違います。どちらも混せて使いますが、口語を使うと歌に現実感や活力が出るので実に楽な面があります。しかし口語だけでも難しいから、結句は文語がいいとか。今は口語と文語については大きな問題になつていて、私たちもうまくできない。自分としては、言葉というのはマーケティングと同じで、カゴに何を入れてもいいよという気持ちもあります。

菅野▼歌のリズムや調べはいかがでしょうか。
馬場▼口語でも五・七・五の型になりますし、石川啄木も口語で詠つているものがありますし、現代では俵万智や穂村弘などそれぞれの口語表現もあります。寺山修司は文語ですが、寺山は文語で詠つても現在感というか、「今」があつたんですよね。だから口語で歌を詠まないで現在感が出せないというのは、その文語作者に文芸精神の点でどこか欠落している部分があるのかもしれないけれどね。

『馬場あき子の「百人一首」』
2016年10月
NHK出版

時代の変わり目を生きる屈折のある内面をみせた風体を好んだということがわかります。私は空穂と俊成というのは大きなテーマだと思つていて、これからも研究していきたいですね。

アメリカ的なものへの反感

菅野▼戦後すぐに短歌を始められた頃は、例えば小野十三郎の「奴隷の韻律」のように短歌的抒情を否定する議論がありましたね。

馬場▼桑原武夫の「第二芸術」もそうですね。
菅野▼当時、読んでみて賛成もできないし、しかし反対もできない微妙なものに感じた覚えがあります。それらに関してはどのような感想を持つておられますか。

馬場▼桑原さんの論文は岩波の「世界」に載りました(「第二芸術——現代俳句について」1946年)。当時はお金がなくてそういった雑誌を買つておらず、先輩達が過敏に反応しているのを耳学問のように聞いて、自分でもとても困りました。短歌なんていうのは鉢植えで、そこに象徴だとか暗喩だとかを入れたら鉢は割れるだろう、といわれたときに、短歌という器は本当に小さいのかわからないと思いました。人麻呂の歌は大きいように思ふけれど、戦中の生活詠や戦地詠は「ごちゃごちゃしているな」と思ひ、短歌の将来をとても憂いたなかの一人です。

そのときに高見順さんが、織田作之助は小説は二流だといつて死んだが、短歌は本本当に二流、三流なかといえ、日本文学から短歌を引き算したら、もし源氏物語から短歌を引いたら何が残るのかと述べた論説に得心しました(「日本文学に於ける写生精神の検討」1947年)。短歌は第二でも第一でもなく日本本来の不思議な文芸伝統であり、世界に類例はないと説かれた。そして私は短歌をやつていこうと思つたのです。前衛短歌は短歌にも暗喩や全体喩など数々の喩を入れて実践していますが、私は古典の学徒でしたから、万葉集には暗喩もあり、全体喩もあり、小さな直喩

もあるのを何で知らないのだろうと思いました。その時は喻の思想性などはまだ考えつかなかったのです。石川啄木は短歌を棒書き（行書き）から三行に書き分けましたが、新しいといわれた書き分けも既に万葉集のなかにあります。それは新しいのではなく、古典というものは、つまり死ななかつた文学なのだから、私は死なないものをつくるために、死なないものを勉強しなければならないと思ったのです。それで、少しずつ安堵しながら自分も歌を詠んでいった気がしますね。

菅野▼当時は近代化という声が各方面で起こっていて、短詩型の世界でも、それに乗るような風潮もあったのではないのでしょうか。

馬場▼私たちのグループでは戦後、近代の超克という大きな課題のようにいわれていました。日本はヨーロッパの近代をまだ十分に受け容れないうちに戦争が始まって、戦争によって社会が激変しました。戦後、本当は近代を読み、近代化について論じなければいけないところにアメリカがドドドツと入ってきて、全てがアメリカ力になつてしまったという……そういう不幸はあるのではないのでしょうか。

菅野▼それはありますね。戦争中に「近代の超克」という有名な大座談会がありました。あの席では、フランス文学の中村光夫さんだけがほとんど沈黙しておられました。彼は日本にはまだ近代はないのだという論者ですね。ところが、ほかの例えば京都学派の哲学者は、西洋の近代はもう没落しているというような議論だから全然噛み合わない。あれは全くむなし議論だったように思います。戦後、社会学者や思想家などがそれぞれに微妙なニュアンスの違いはあるけれど、言葉としては「近代化」が今の日本に課せられた大きな課題だといわれました。また一方で、近代的自我を確立しなければならないと近代文学の人たちがいましたね。結局、一種のから騒ぎのようなもので、あまり真剣な話題になりきれなかったところはあのではないかと思えます。

馬場▼菅野さんが戦後フランス文学に向かわれた

菅野▼作風に、ご自分で変化というものは感じますか。

馬場▼私はその変化があるのが特色で、第一歌集は素人のような歌集を出して、方法がないと批判されました。次は社会的な闘争的な題材が入ったものとなり、社会派の歌人といわれました。それから10年のブランクを経て、今度は物語的な劇的な世界を取り入れた作品を入れるなど変化を迫っています。『桜花伝承』（1977年）という歌集があるのですが、それで初めて自分の作風が安定したと思っています。

菅野▼それは具体的にどのような感じですか。

馬場▼あれもやりたい、これもやりたいと思うと何でもできる気がして、いったん自分の作風をめちゃくちゃにしてみました。例えば60年安保から70年安保にかけて、高校の教師をしていました。まともに安保闘争を歌するのは難しい。それで治承の乱に仮託して詠もうとか、式子内親王として詠もうとか、他者という人間の内部に注目して屈折を抱えた今の人間の姿を詠いたい思いがありました。いろいろなテーマを設定して、イザナギが下りていった地獄と、今の社会とを地続きなかたちで詠うなどの試みが時間を経て落ち着きましてね。古典的な色調を帯びた現代短歌に辿りついたのが『桜花伝承』で、やっと自分の文体が安定したという思いがしました。

菅野▼馬場さんにとって、どのような古典詩歌を身近に感じますか。例えば、『古今和歌集』と『新古今和歌集』とを比べると。

馬場▼古今集が好きですね。卒論は新古今なのでですけど、新古今は鋭くて人間味を探るのがとても難しくそこが面白くもあります。比べるとやはり古今集は万葉集の次の原点だと思います。古今集には、ふくふくとした、柔らかな人間味が感じられます。



菅野▼馬場さんの歌には古典的な詩歌の蓄積にもとづいた豊かさがありますね。現代を詠うこと、現代のいろいろな風俗、あるいは精神風俗といいますが、現代人の生き方への眼差しがうまく融和されたような近代短歌をつくられているように思います。これからの日本の短歌はどのようになっていくと思われませんか。

馬場▼私はもう私の道を歩くしかないと思いますし、我々の世代はもう、自分の道というのは大体決まっているとも思います。現在、短歌の世界は世代の層が厚いです。20代は気ままな自由さがありますが、30代は苦悩しながら自分自身の短歌改革をやろうとしている。40代というのは上に引つ張られ、下に引つ張られ、自分の作風がちよつと不安定ですよ。そして50代は落ち着いた方向に引つて、自分を保とうとするわけです。けれども本当は、彼らは力のある人たちのだから冒険してくれないといけない。そのあたりは、少し層が薄いかなという気がします。

その言葉をノートしたりしたもののが今も少しあります。当時は戦後の次の世代を育てる基礎的な書物のひとつでした。

菅野▼もちろんアメリカの文学も読みましたけれども、アメリカの文学とか、アメリカの思想とかいうものに反感を持っているわけではないのですが、当時は何となく距離を置いて接する感じでした。

馬場▼何となく嫌なのですよ。私たちもそうでした。昨日までいろいろいつていた先生が沈黙して授業で何もいわなくなる。それで「もうこれからはお前たちの時代だから自分で考えなさい」といわれても、まわりに参考になるものがなくて。毎朝来る新聞は些末な記事ばかりで、どこそこ女の人が野犬に噛み殺されたとかいう生々しいことしか書いていない。そんなときに国文科の単位の一環として能を観て、ポンとはまりました。

菅野▼能は授業で行ったのですか。

馬場▼はい。能楽堂も焼けてしまい、駒込にある染井という能楽堂と多摩川の観世流の能楽堂くらいしかなかったのですが、そこで観た「隅田川」という能にすっかり魅了されましたね。あれは何でしょう、もしかするとアメリカ的なものに対する反感もあったのかもしれない。昭和22年という時代は戦争で子どもを亡くしたお母さんや、お兄さんをなくした女の人たちが沢山いました。シテは行方不明の子どもを訪ねる母で、その面から目が離せませんでした。能の面はひとつなのに、そこに沢山の女の顔があるのを見て、どうにもならず縛られたのです。最後に死んでしまった子どもと再会する場面で、客席からすすり泣きが起きましたが、あれは戦後ならではの光景だったのではないかと思います。半年ほど経ってまた能を、今度は自分から観に行きました。そのときは鬼の能だった。染井の能楽堂は天井に窓が開いていて、その天窓から射す光で鬼の面がサツと曇るとき、暗れるときの表情の変化に驚いてしまつて。能はほとんど面から入ったといえますね。



菅野▼それは一応できているかたちは取っていますが、むなしい気もします。専門の歌人同士は誰をどのように、どの歌を認めるかということとはわかりにくい。後世に残る歌は自然に残っていくのでしょけれども、不思議なものです。そのあたりは、これからどうなるのかわからないです。

菅野▼短歌もそうですが言葉をもつと磨いてほしいですね。それからまた、馬場さんたちが苦心、苦闘してこられたように、古典詩歌の生かせるところはどんどん生かして。

馬場▼古典を読む時間はないとしても、せめて百人一首だけは読んでほしいと思います。

怒れる猫の目

菅野▼話は変わりますがもうひとつ。今は三十一文字でない短歌が増えていますね。四十一文字というか。今後そのような流れができていくのでしょうか。

馬場▼私もこのごろ、初七になるところがあります。五七五じゃなくて、七七五になってしまふ。なぜかという、外来語や口語が入ってくる。詠いだしが七になりやすいです。これはいけないと思う、自分ではなるべく五にしようと思うのですが、勢いに乗って出てくる歌は初七になるというか。今は七音時代なのかもしれません。つまり

菅野▼それが最初のご経験ですか。

馬場▼能体験です。そのときのシテが喜多実でした。何というすごいものがあるのだろうと思い、月謝のことも考えずにすぐに入門しました。

菅野▼能はずっと続けられて。

馬場▼そうですね。82歳まで続けましたが、動きや姿勢の部分で、自分がこれ以上舞っても、かつての私を超えるものは出せないと思つて止めました。今もそうですが、能で覚えた文言にどれだけ助けられたかわかりません。

自分の歌を求めて

菅野▼馬場さんの歌でショックを受けたのは「哲学のない男たち」という歌でした。哲学のやうな男もあなくなりみだりがはしみをみなの昼餉（『飛種』1996年）。ダラシない男どもよ、と叱られた感じでした。

馬場▼詠ったのは覚えていません。

菅野▼哲学のない男たちばかりでつまらない。それだけでなく、つまらなくなつた女たちが難然と食っている。あれは非常にショックを受けました。僕は哲学ないからなと思つて。

馬場▼昭和20年代から30年代にかけては、広い意味で哲学が盛んだったように思います。当時は「あの男、哲学ないからね」とかいつていましたよね。人生の哲学がないという意味でね。

菅野▼ところで馬場さんは全集も出しておられますが、歌集は何冊くらいになりましたか。

馬場▼26、7冊ありますね。3年に1冊くらいのペースでしょうか。

り五音の力がなくなっている時代。かつて、最初の五音は「神の言葉」といわれたのですけれども。昭和30年代に塚本さんが始めた前衛短歌は「言葉」の短歌でもありました。言葉で絵やイメージを描く、そういう短歌ですよ。その「絵」が並大抵ではなく、絵そのものの中に時代批判があつたりしました。有名なのは、百人一首にある周防内侍の「春の夜のゆめばかりなる手枕にかひなくたたむ名こそをしけれ」の「手枕」を本歌として、塚本さんは「春の夜の夢ばかりなる枕頭に」と詠い始める。「え？」と思うと「あつあかねさす召集令状」となる歌です。他にも「突風に生卵割れ、かつてかく撃ちぬかれたる兵士の眼」がありすが、割れてドロツと流れた卵と、鉄砲の弾に撃ち抜かれた兵士の目を重ねて詠う。社会批判も戦争批判もこういうかたちでできるのだというところがわかりました。今、それをやらなきゃならないときがきたのになかなかできないんです。状況が複雑すぎるのでしようね。

菅野▼それは文学全体にいえると思います。そういう運動というか、衝撃、ショックを与えるようないろいろな言説が繰り返して出てこないといけない動きに繋がりにくいと思います。今はそれが必要な時代でしようけれどね。

馬場▼力がないし、気力がない。今日の展示室にあつたような、ああいう猫の目を見てもういっぺん怒り直さなきゃいけないと思つています。ミロコマチコさんは幾つくらいの方ですか。

菅野▼36歳。

馬場▼やっぱりね。だからできるんですね。一番力があるとき。

菅野▼ミロコさんは実力がある絵描きですね。馬場▼目がいい。動物がみんな怒っていますね。動物たちに「何だこの人間」つていわれているやうです。また猫の目が実にいいけれど、一匹だけ、木槿の花が散るのを眺めている猫だけが寂しう。あとの猫は全部怒っています。二面性があるところがいいですね。ああいうふうに怒りたいはずですよ、みんな。

〔2018年1月30日 世田谷文学館館長室にて〕

《齋藤茂吉旧蔵 諸家短冊帖》より
平福百穂短冊

平成29年度の新収蔵資料《齋藤茂吉旧蔵 諸家短冊帖》は茂吉の妻・輝子より次男の北杜夫（本名・齋藤宗吉）に伝えられた1帖で、102枚の短冊が納められています。茂吉自身と茂吉の師・伊藤左千夫や、島木赤彦、長塚節、中村憲吉、古泉千樫、土屋文明、岡麓、結城哀草果ら「アララギ」同人をはじめ、歌壇俳壇に名を刻む高浜虚子、金子薫園、北原白秋、吉井勇、水原秋桜子、与謝野晶子、柳原白蓮、岡本かの子ほか、茂吉が敬愛する大先達の正岡子規、夏目漱石、幸田露伴、さらに芥川龍之介も2枚あります。子規と交流が深かった、画家で書家の中村不折、歴史画に秀でた日本画家の安田靉彦、詩歌も能くした竹久夢二ら美術家まで含まれた実に豪華な顔ぶれの短冊帖です。

この短冊帖中に14枚と最も多く納められているのが、日本画家で歌作にも親しみ、左千夫、赤彦、茂吉らと「アララギ」を興し、支えあつた平福百穂（1877〔明治10〕～1933〔昭和8〕年）が手がけた短冊です。このうち、自らの歌が6枚、絵のみが5枚、百穂の絵の上に赤彦、憲吉、千樫が歌を書いたものも3枚を数えます。

苦境時代の「アララギ」を支えた同人

百穂と短冊といえば、すぐに「アララギ短冊会」を思い浮かべる方もいることでしょう。
1908（明治41）年に創刊された「アララギ」は長らく資金繰りに苦勞し、こうした困窮を解消するため、1914（大正3）年と翌年2月の二度に亘り百穂の絵画頒布の会を募ります。それだけでなく百穂は画稿料の一部を刊行費用に提供したり、茂吉の留学費用の援助を申し出るなど、同人たちへの支援も惜しみませんでした。

資料受贈報告

2017年10月24日～2018年1月31日

▼齋藤喜美子様より北杜夫・齋藤茂吉資料

▼安立公彦様 有本俱子様 岡田朗広様 久保木宗様
美坂容子様 峰岸了子様 湯本香樹実様

平成30年度 コレクション展前期

2018年4月28日（土）～9月17日（月・祝） 1階展示室

新収蔵・北杜夫コレクションを中心に

ムットーニのからくり書物

コーナーにも新プログラム登場！

平成30年度前期のコレクション展では平成29年度に当館にご寄贈いただいた、初公開も含めた日本文学史に名を刻む作品、作家にまつわる文学資料を中心にご紹介いたします。

当館では世田谷にゆかりの深い小説家・北杜夫氏ご本人（1927〔昭和2〕～2011〔平成23〕年）と喜美子夫人からこれまでも貴重な資料をご寄贈いただいて参りましたが、平成29年度の新たな寄贈資料から北氏の芥川賞受賞作『夜と霧の隅で』原稿、日本文学大賞受賞長篇『輝ける碧き空の下で』原稿に加え、歌人の父親・齋藤茂吉（1882〔明治15〕～1953〔昭和28〕年）の歌集稿本や書画などの自筆資料、茂吉の師・伊藤左千夫や敬愛してやまなかつた正岡子規、森鷗外、幸田露伴らの短冊や書軸など、茂吉が手許で大切にしていた資料をも一堂にご紹介いたします。

また、コレクション展の人気コーナー「ムットーニのからくり書物」には、今期から中原中也の詩「地極の天使」にもとづく《アトラスの回想》、芥川龍之介の短篇《蜘蛛の糸》、萩原朔太郎の同題詩《題のない歌》による3作品が新たに加わります。これまでの7作品も含め、上演プログラムを組み替えながらお届けします。どうぞお楽しみに。

「アララギ短冊会」も再び会計を立て直すため計画され、1915（大正4）年10月号によると百穂の短冊絵に赤彦、茂吉、千樫、憲吉が自作歌を揮つて販売、本短冊帖の中にその時作られたものも含まれています。好評だったそうで、百穂の短冊が一番多く、半分は歌がないものも含めて短冊絵であるのは、このようないきさつに拠るのかもしれない。千樫は、百穂がこうした色紙や短冊でも手を抜かず、歌人の字が上手いかなかったせいでも納得できない作は絵から描き直したと述べたそうです。その回想のとおり、残された絵短冊もいずれも丁寧な描かれています。



赤彦、梅雨はれし草のしげりの丘の空青ければそ白き馬行け
「アララギ短冊会」出品作

百穂（本名：貞蔵）は秋田の角館に生まれ育ち、1894（明治27）年、上京して川端玉章の門に入り、同門の結城素明と知り合います。美術史では、素明との出会いは自然主義的表現を標榜する無聲会の結成に繋がる出来事ですが、文学の上では「馬酔木」同人でもあつた素明を通じて伊藤左千夫と知り合い、周囲の歌人たちとも交流が生まれ、やがて歌作に取り組み、「アララギ」に参加する発端と言えます。もちろん気鋭の日本画家で、新聞や雑誌の挿絵や漫画、創作版画も手がけた百

穂は、「アララギ」でも表紙やカットで画家としても貢献します。歌人たちから同人として、恩人として敬愛されていたことは、1933（昭和8）年10月に急逝した際、「アララギ」の追悼号（34年4月号）がどの美術雑誌よりも大部な338頁の特集を捧げたことから伝わります。

百穂の歌と短冊

百穂の歌との出会いや思いは、唯一の歌集『寒竹』（1927〔昭和2〕年、古今書院の「巻末記」に詳しく書かれています。当初、富士登山や写生旅行先で歌心が動き、その作で伊藤左千夫に教えを乞うと、添削や助言のうえ「馬酔木」にも掲載されました。左千夫は長塚節が雑報歌、報告歌と厳しく斥けたものでも手を入れて採つてくれたといま

す。左千夫と長塚の亡き後は茂吉に教えを乞い、茂吉が東京を離れると赤彦にも見てもらいます。

百穂は、1919（大正8）年に世田谷の三宿に画室を建て、画塾も置きます。ここが「白田舎」で、1921年作の「白田舎歳晩」には画業や画塾への苦悩も詠まれています。この時期の焦燥や辛い心情を「ただ歌にのみよつて、心神の平衡を保つた」と記し、赤彦もこれ以降百穂の歌柄が進んで来たと評価します。茂吉は「アララギ」の百穂追悼号の「平福百穂画伯」で、百穂の歌の本質は無聲会以来の信条そのままに、写真写生を旨とし、思わせぶりを含ませるのを嫌う一方で、絵で培った鋭い観察眼が歌でも鋭敏さとして表れると述べています。しかし、生一本の性情の百穂は「真剣に歌の苦勞といふことを知つて、遂、絵の事を忘れて、茫然と考へ込む」（『寒竹』）に至り、昼間の時間は歌に割かないことにしたそうです。

短冊には「寒竹」未収録作も見られます。「川端玉章先生の画塾にありしころ」と題された「ランブのホヤのくもりを拭きつつ息ふきかけて心みださず」（「アララギ」1928年5月号掲載）は、画塾と塾生を率いる身になつての作。玉章の元にいた

土博物館 鈴鹿市文化スポーツ部文化財グループ 仙台文学館 高梁比庵会 田原市博物館 たましん歴史美術館 都留市博物館 東京かわら版 二松學舎大学附属図書館 日本歌人クラブ 沼津市片沢光治良記念館 姫路文学館 福岡市文学館 ふくやま文学館 藤沢周平記念館 文京ふるさと歴史館 武蔵野ふるさと歴史館 武者小路実篤記念館 山田風太郎の会 与謝野晶子倶楽部 吉村昭研究会 早稲田大学會津八ッ記念博物館

主な展示品（予定）
＊会期中、展示替えがございます。また、出品予定作品が変更になる場合がございます。ご了承ください。

- 北杜夫原稿 『夜と霧の隅で』
- 北杜夫原稿 『輝ける碧き空の下で』
- 齋藤茂吉歌集稿本 『遠遊』（第四歌集）、『遍歴』（第五歌集）、『としび』（第六歌集）、『たかはら』（第七歌集）、『連山』（第八歌集）、『白桃』抄（第十歌集）、『暁紅』抄（第十一歌集）、『寒雲』抄（第十二歌集）、『霜』抄（題箋）歌集と『ろくさ』第十四歌集
- 齋藤茂吉書画 短冊
- 齋藤茂吉旧蔵 森鷗外書軸、幸田露伴書軸、正岡子規書簡軸
- 齋藤茂吉旧蔵 諸家短冊帖（正岡子規、与謝野晶子、夏目漱石、芥川龍之介、「アララギ」同人ほか）

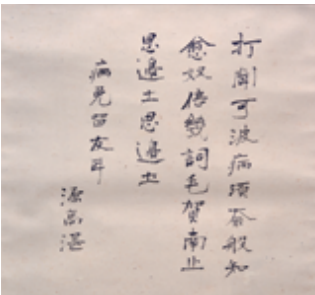
他に、青山光二「われらが風狂の師」原稿、自筆ノートなど



北杜夫『夜と霧の隅で』原稿



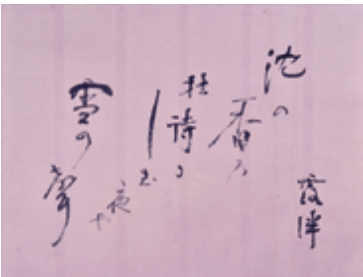
齋藤茂吉 歌集稿本
『遠遊』（左）、
『たかはら』（下）



森鷗外書「打開可波病須奈般知…」



正岡子規 鈴木茅村あて書簡



幸田露伴書「沈の香の杜詩にしむ夜や雪の声」

頃、掃除も決して手を抜かなかつた、こうした労働を無益だつたと思わないとの回想を残しています。もう1枚の「アララギ」1925年6月号掲載の「ふかき谷にのぞみ憩へり目の下の大木の枝に鳥止まりある」は万葉仮名で書かれています。

万葉仮名と書体

実はこの短冊帖にある百穂自身の歌は、玉章画塾の歌を除く5枚とも万葉仮名で書かれています。その書体も変えており、うち2枚の細い字の書体は、古事記に題材を採つた「神語」（1918年、秋田県立近代美術館蔵）の画中の文字と通じています。百穂の画は自然主義的写真から古典への深い造詣が融和した作風へと展開されますが、「アララギ」百穂追悼号で安田靉彦は「画の方に歌のやうな万葉集の本格的な道を開拓して頂きたかつた」と惜しんでいます。

画と歌と書―百穂は帝国美術院会員となり帝展審査員、東京美術学校教授を歴任し画家として功績を認められていましたが、もつと長く活躍したらどのような三位一体の世界を創出したか、残された短冊を見ていると55歳の死が惜しまれます。
＊本短冊帖は、平成30年度コレクション展前期でご紹介します。会期中展示替えがございます。



「山だにも見えぬの原とよせし戦の蹟に我は来にけり」（清澄山行）

「ふかき谷にのぞみ憩へり目の下の大木の枝に鳥止まりある」（清澄山行）

▼「海」「街道」「空想カフェ」「くさくさ」「九品仏川柳会句会報」「群系」「原型富山」「鴻」「心の花」「埼玉文学」「山暦」「鹿首」「児童ペン」「春耕」「抒情文芸」「駿河台文芸」「川柳研究」「蠶」「タルタ」「短歌人」「地中海」「飛火」「白」「プチ★モンド」「本のParking」「窓」「ゆく春」「ランブル」「りんごの木」

（五十音順・団体名敬称略）

林芙美子 貧乏コンチクショウ ―あなたのための人生処方箋―

会期：2018年4月28日(土)～7月1日(日)
会場：2階展示室



林芙美子 1931年 新宿歴史博物館蔵

隣人とか／肉親とか／恋人とか／それが何であ
ろう――

生活の中の食うと言う事が満足でなかったら／
描いた愛らしい花はしぼんでしまう／快活に働
きたいものだと思つても／悪口雑言の中に／私は
いじらしい程小さくしゃがんでいる。

両手を高くさし上げてもみるが／こんなにも可
愛い女を裏切つて行く人間ばかりなのか！／いつ
までも人形を抱いて沈黙っている私ではない。

お腹がすいても／職がなくつても／ウフオ！と
叫んではならないんですよ／幸福な方が眉をお
ひそめになる。

(中略)

陳列箱に／ふかしたてのパンがあるが／私の知ら
ない世間は何とまあ／ピアノのように軽やかに美
しいのでしょう。

そこで始めて／神様コンチクショウと吐^ど鳴りたく
なります。

「苦しい唄」「蒼馬を見たり」より



原稿「放浪記第3部 あとがき」 新宿歴史博物館蔵



世田谷区太子堂の二軒長屋(1925年、芙美子は写真右側中央の平屋に野村吉哉と同棲。その右隣には壺井繁治・栄夫妻が住んでいた)

幼少期の行商生活を経て、職を転々としながら
も詩や童話を書き続けた林芙美子(1903「明治
36」～1951「昭和26」年)は、自らの貧困生活
へ立ち向かうように、生きる苦しみを吐露し、血
みどろの人生を奔放な文体で表現しました。と
りわけ『放浪記』は、映画やテレビ、そして舞台な
どに姿を変え、ひたむきに力強く生きる女性を
描いた名作として、戦前・戦後を通じて多くの読
者を魅了し続けています。

芙美子は1925(大正14)年、世田谷区太子堂
の二軒長屋で詩人・野村吉哉と暮らしました。肺
を患った野村は暴力的で争いが絶えない辛い生活
でしたが、近隣には壺井繁治・栄夫妻、平林たい子

等が暮らしており、作家仲間を支え
られた時期もありました。しかし、
翌年には野村と別れ世田谷を離れま
す。自宅を構えるまで、住まいを転々
とし旅を愛した林芙美子。その作
品は作者自身の前向きな人生観に
裏打ちされており、労苦の多かった
人生経験がその奥行を形作っていま
す。本展では宿命的放浪の作家・林
芙美子のことばを、現代の私たちへ
のメッセージ《幸福に生きるための処
方箋》と捉え、原稿・書簡・絵画など
約250点の資料でご紹介します。

場！会場を流しながら芙美子の詩を朗読するパンチの効いた
ひとときをご一緒にどうぞ。

出 演：デリシャスウィーツ

会 場：2階展示室 参加費：無料

申込方法：当日、直接会場にお越しください。

＊入場には展覧会チケットが必要です。

●フィールドワーク 芙美子のまちを歩く・落合篇

5月26日(土) 13時30分～16時30分

芙美子が晩年の10年間を過ごした家(設計：山口文象)を
訪ねます。

参加費：300円(入館料、傷害保険、資料代込み)

定 員：20名 ＊事前申込制 申込締切：5月12日(土)必着

申込方法：締切日までに往復ハガキに ① イベント名、② 参加者名・年齢(2名まで連名
可)、③ 代表者の住所・電話番号を明記のうえ、世田谷文学館「林芙美子」係へお申し込
みください。返信面にも代表者の住所・氏名をご記入ください。応募者多数の場合は抽
選となります。結果は締切後、返信ハガキでお知らせします。

●本と食の蚤の市 セタブンマーケット＋烏山下町まつり

6月2日(土) 10時～15時

思春期を広島県・尾道で過ごした芙美子にちなみ、「ひろしまブランドショップTAU」から
広島のグルメをお届けします。セレクト書店、ワークショップなどを開催するミニマーケット
をお楽しみください。 ＊当日は全館無料観覧日



デリシャスウィーツ

どこでも文学館

世田谷文学館「どこでも文学館」事業は、「いつ
でも・どこでも・だれでも参加できる」を活動方針
として、「地域に根ざした文学館」となることを
目指し、地域と協働しながら事業を実施して
おります。この事業は、館内外で行うワークショッ
プなどを地域交流催事、図書館や小中学校での
出張展示を地域交流展示と位置づけ、「地域の子
ども」「地域のおとな」「博物館」を積極的につな
げる役割を担い、それにより幅広い層と地域への
浸透を図っております。

地域交流催事では、施設見学のほか、参加者
の熟練度をあげる段階型出張ワークショップを
行いました。また、芦花小学校では4年生約
150名を対象とした3日間のプログラムを実
施し、完成した写真作品を粕谷区民センターで展
示しました。館内では、「本づくり」ワークショッ
プとして、ショートショート小説を制作し、装丁画
を描き製本する、5回にわたる連続プログラムを
実施しました。そして、多くの人が集まる地域の
祭りと連携したセタブンマーケットでは、幼児か
ら高齢者まで世代を超えて、自然素材と触れあ
える自由参加型のワークショップ「ネイチャーコ
ラージュ」を開催しました。いずれも若手の作家
やアーティストと協議しながらプログラムを作っ
ています。

一方、地域交流展示では、図書館職員や学校の
先生、施設担当者や打ち合わせながら、利用者
ニーズの把握に努め、新たな出張展示キットの開
発に活かしました。また本年度は、初めて書店や
アウトドアショップで、「大竹英洋 北の森 ノース
ウッズの世界」写真パネル展を開催しました。
このような事業の成果を、広報やインターネッ
トを通じて報告しながら、これまで当館をご利用
いただいていない方々にも関心を持っていただけ
るよう活動しております。



世田谷区立中央図書館での「SF入門 Vol.1 星新一」パナーの展示



「本づくり」ワークショップ 第2回「だれでも絵描き」2017年9月24、25日

平成29年度 第34回 世田谷文学賞

5部門で作品を募集し、最年少は7歳から最高齢は96歳まで、
合計267人から応募がありました。
入賞者の作品は「文芸せたがや」34号でお読みいただけます。

- | | |
|--------------------|-----------------|
| ◎ 短歌 (応募者44人) | ◎ 詩 (応募者40人) |
| 〔一席〕 野上卓 | 〔一席〕 丸山令子 |
| 〔二席〕 新井光雄 | 〔二席〕 外山孝和 |
| 〔三席〕 田村敦子 菅田恵子 | 〔三席〕 花潜幸 堀内敦子 |
| 〔秀作〕 善生由華 ひらおかのりあき | 〔秀作〕 柳本光恵 金城真喜子 |
| 〔佳作〕 奈良雄次 堀越照代 | 〔佳作〕 東和郎 出馬希美代 |
| 綿貫勲 丸山ゆうな | 長縄亮 宮下浩子 |
| 桑原謙一 花田浩子 | 石川厚志 こいも |
| 山口弘子 入谷慈雨 | 内藤利恵子 こしとちお |
| 大祝慶 内田知成 | 佐藤彰 丸山ゆうな |
| ◎ 俳句 (応募者81人) | ◎ 随筆 (応募者38人) |
| 〔一席〕 富山光義 | 〔一席〕 田中凡 |
| 〔二席〕 影山十二香 | 〔二席〕 辻井君仔 |
| 〔三席〕 長谷川瞳 磯貝由佳子 | 〔三席〕 木本裕子 池田さか江 |
| 〔秀作〕 藤森成雄 國領麻美 | (敬称略) |
| 〔佳作〕 斎藤秀雄 河原久廼 | |
| 丸山ゆうな 山宮有為子 | |
| 原田街子 小杉佐恵 | |
| 岡部哲平 大庭恵美子 | |
| 長谷川明彦 白根佐久良 | |
| ◎ 川柳 (応募者64人) | |
| 〔一席〕 山田信恵 | |
| 〔二席〕 海道かつ代 | |
| 〔三席〕 柏崎澄子 山口千鶴子 | |
| 〔秀作〕 藤井玲子 平田信正 | |
| 〔佳作〕 中村松郎 内田閑磔 | |
| 山田孝 宮下浩子 | |
| 岩崎能楽 西野和子 | |
| 長谷川直次郎 北條忠政 | |
| 且味香子 小川芳明 | |





筒井康隆 写真提供:文藝春秋

筒井康隆展

開催期間:10月6日(土)～12月9日(日)

会場:2階展示室

『時をかける少女』『七瀬ふたたび』『虚人たち』『虚航船団』『旅のラゴス』『残像に口紅を』『文学部唯野教授』『モナドの領域』……、エンターテインメントと純文学の垣根を自由に越境、常に読者を驚かせ、魅了し続ける作家、筒井康隆。既存の文学・概念をぶち壊し、その文学を形容することばを探しても、並べたその先から陳腐化してしまう、完全降伏せざるを得ない唯一無二の存在です。2018年、世田谷文学館は現代文学最高峰「筒井康隆」に挑みます。すべてにおいて規格外のこの作家の魅力を、初公開の原稿ほか多彩な資料と、独創的な展示空間でお伝えします。

観覧料:一般 800(640)円
高校・大学生・65歳以上 600(480)円
障害者手帳をお持ちの方 400(320)円
中学生以下 300(240)円
*()内は20名以上の団体割引料金
*10月12日(金)は65歳以上無料

秋 春

林芙美子 貧乏コンチクショウ —あなたのための人生処方箋—

開催期間:4月28日(土)～7月1日(日)

会場:2階展示室

観覧料:一般 800円(640円)、
高校・大学生・65歳以上 600円(480円)、
障害者手帳をお持ちの方 400円(320円)
小・中学生 300円(240円)
*()内は20名以上の団体割引料金
* 無料観覧日の詳細については、12頁をご覧ください。

後援=新宿区、公益財団法人新宿未来創造財団 新宿区立新宿歴史博物館、新宿区立林芙美子記念館、世田谷区、世田谷区教育委員会

● 展覧会の内容は8頁をご覧ください。



夫・緑敏と共に 1934年 新宿歴史博物館蔵



林芙美子『放浪記』1930年

冬

第37回 世田谷の書展 世田谷ゆかりの作家たち

開催期間:2019年1月8日(火)～14日(月・祝)

会場:1階文学サロン

観覧料:無料



夏

BE MY BABY 信藤三雄 レトロスペクティブ

開催期間:7月14日(土)～9月17日(月・祝)

会場:2階展示室

松任谷由実、ピチカート・ファイヴ、Mr. Children、AKB48など、日本の音楽シーンをリードしてきた数多くのミュージシャンのCDジャケットを手がけ、新鮮なヴィジュアルイメージと革新的なプロダクトを生み出してきたアートディレクター、信藤三雄(1948～)。写真家、映像ディレクター、書家、音楽家としても才能を発揮し、その作品は各方面のクリエイターにも影響を与え続けています。本展では80年代の初期作から最新の仕事に至るまで、時代とともにあり続けたアートワークの数々を展覧し、創作プロセスを示す貴重な資料も交えながら、信藤三雄のクリエイティビティの全貌に迫ります。

観覧料:一般 800(640)円
高校・大学生・65歳以上 600(480)円
障害者手帳をお持ちの方 400(320)円
中学生以下無料
*()内は20名以上の団体割引料金 *7月20日(金)は65歳以上無料
*9月17日(月・祝)は60歳以上無料

ピチカート・ファイヴ「さ・え・ら ジャパン」
(レディメイド・レコーズ、トーキョー/ヒートウェーブ/2001年1月1日)
Art Direction: 信藤三雄

ヒグチユウコ展 Circus

開催期間:2019年1月19日(土)～3月31日(日)

会場:2階展示室

緻密なタッチで描かれた可愛くて少しダークな世界観で、女性を中心に幅広い層から絶大な支持を集めている画家、ヒグチユウコ。個展などを通じた作品発表の傍ら、『ふたりのねこ』(2014)で絵本作家としてもデビュー。さまざまな企業とのコラボレーションなどでも活動の幅を広げています。本展は初期作品から最新作まで、約20年の画業の中で描かれた400点以上(予定)の作品を展示する初めての大規模な展覧会です。奇想の画家ヒグチユウコの描く猫や少女、キノコ、この世ならぬ不思議な生物たちが繰り広げる、楽しくてどこか切ないサーカス(Circus)の世界をお楽しみください。

観覧料:一般 800(640)円
高校・大学生・65歳以上 600(480)円
障害者手帳をお持ちの方 400(320)円
中学生以下無料
*()内は20名以上の団体料金
*1月25日(金)は65歳以上無料

《くまのたまご》2017年



企画展

林美子
貧乏コンチクショウ
—あなたのための
人生処方箋—4月28日(土)～7月1日(日)
2階展示室

観覧料:

一般 800(640)円
高校・大学生・65歳以上 600(480)円
障害者手帳をお持ちの方 400(320)円
小・中学生 300(240)円* ()内は20名以上の団体割引料金
* 4月28日(土)は開館記念無料観覧日
* 5月4日(金・祝)は65歳以上無料
* 6月2日(土)は地域祭事に伴い
全館観覧無料日

箕輪麻紀子《貧乏コンチクショウ》2018年



BE MY BABY 信藤三雄 レトロスペクティブ

7月14日(土)～9月17日(月・祝) 2階展示室

観覧料:

一般 800(640)円
高校・大学生・65歳以上 600(480)円
障害者手帳をお持ちの方 400(320)円
中学生以下無料
* ()内は20名以上の
団体割引料金
* 7月20日(金)は65歳
以上無料
* 9月17日(月・祝)は60歳
以上無料

信藤三雄



企画展

林美子 貧乏コンチクショウ—あなたのための人生処方箋— 4月28日(土)～7月1日(日)

BE MY BABY 信藤三雄 レトロスペクティブ
7月14日(土)～9月17日(月・祝)

4月

5月

6月

7月

コレクション展

新収蔵・北杜夫コレクションを中心に 4月28日(土)～9月17日(月・祝)

コレクション展 前期

新収蔵・北杜夫コレクションを中心に

4月28日(土)～9月17日(月・祝) 1階展示室

観覧料: 一般 200(160)円 高校・大学生 150(120)円
小・中学生、65歳以上・障害者手帳をお持ちの方 100(80)円
* ()内は20名以上の団体割引料金
* 小・中学生は、毎週土日祝、夏休み期間中、観覧無料
* 4月28日(土)は開館記念全館無料観覧日
* 5月4日(金・祝)と7月20日(金)は65歳以上無料
* 6月2日(土)は地域祭事「下町まつり」に伴い、全館無料観覧日
* 9月17日(月・祝)は60歳以上無料

せたがや文化財団の催し物

- 世田谷美術館 [Tel. 03-3415-6011]
- 人間・高山辰雄展 — 森羅万象への道
4月14日(土)～6月17日(日)



高山辰雄《少女》1979年 個人蔵

- 世田谷美術館分館
向井潤吉アトリエ館
[Tel. 03-5450-9581]
- 向井潤吉 民家と街道
4月3日(火)～8月26日(日)
- 世田谷美術館分館
清川泰次記念ギャラリー
[Tel. 03-3416-1202]
- 清川泰次 色と色のハーモニー
4月3日(火)～8月26日(日)
- 世田谷美術館分館
宮本三郎記念美術館
[Tel. 03-5483-3836]
- 宮本三郎 親密な空間
4月3日(火)～8月26日(日)

- 世田谷文化生活情報センター
世田谷パブリックシアター
[Tel. 03-5432-1515 チケットセンター]
- KAAT 神奈川芸術劇場 ×
世田谷パブリックシアター
『バリーターク』
4月14日(土)～5月6日(日)
KAAT 神奈川芸術劇場〈大スタジオ〉

5月12日(土)～6月3日(日)
シアタートラム作: エンダ・ウォルシュ 翻訳: 小宮山智津子
演出: 白井晃
出演: 草薨剛 松尾諭 小林勝也 ほか
* 神奈川公演の詳細はKAAT 神奈川芸術劇場
のHPをご覧ください。

- 一狂言劇場 特別版—
能『鷹姫』・狂言『橋山節考』
6月23日(土)～7月1日(日)
世田谷パブリックシアター
出演: 野村万作 野村萬斎/
大槻文蔵 片山九郎右衛門/
観世喜正 大槻裕一/ほか万作の会

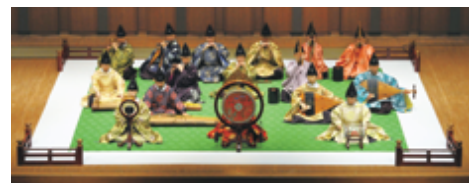
- 世田谷文化生活情報センター
生活工房 [Tel. 03-5432-1543]

- 子どもワーク
ショップ 2017
報告展
「14歳の
ワンピース」展
4月19日(木)～
5月13日(日)
生活工房ギャラリー
- DAYS JAPAN 写真展 2018
地球の上に生きる
「世界の未来をつくるために」
5月19日(土)～6月10日(日)
生活工房ギャラリー、ワークショップルームB



撮影: ゆかい

- 世田谷文化生活情報センター
音楽事業部 [Tel. 03-5432-1535]
- シリーズ和・華・調 第1回「雅楽」
曲目: 平調音取—越天楽残楽三返(管弦)、
蘭陵王(舞楽) 他
6月30日(土) 15時 成城ホール 出演: 伶楽舎

開館時間: 10時～18時(展覧会入場は17時30分まで)
休館日: 毎週月曜日(月曜日が祝日の場合には開館し、
翌平日休館)交通案内: 京王線「芦花公園」駅南口より徒歩5分
小田急線「千歳船橋」駅より京王バス(千歳烏山駅行)利用
「芦花恒春園」下車徒歩5分

公益財団法人せたがや文化財団

世田谷文学館 SETAGAYA LITERARY MUSEUM

〒157-0062 東京都世田谷区南烏山1-10-10
Tel. 03-5374-9111 Fax. 03-5374-9120
ホームページ <http://www.setabun.or.jp/>